日本IT書紀

182 暴発

10 迅風篇
巻之二十五 懊悩

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第百八十二

暴　発

一

第百七十九「赤軍」の続き。

六九年十一月、新左翼諸派は同月十七日の佐藤訪米阻止に向けて、その年最大規模の動員をかけていた。治安当局も対抗して大規模な捜索活動を行った。

まず十一月十四日に川崎地区の活動家宅、勤務先十七か所を強制捜索し、併せて中核派拠点二か所から火炎ビン計二千九百六十八本を押収した。次いで十六日には中央大学、一橋大学、東京外語大学などの学生寮を強制捜索し、事前の戦力削減を図った。

並行して敷いた警備体制は、首相一行を羽田まで空輸する自衛隊ヘリコプター四機、護衛用ヘリコプター六機のほか、機動隊を首相官邸に三百人、霞が関一帯に三千人、蒲田から羽田空港にかけて二万人を配備して三重の防衛線を張る物々しさだった。

衝突は十六日夕刻から始まった。

当時の新左翼の闘士には定番のスタイルがあった。ヘルメットをかぶり、タオルで覆面をし、ビニールのレインコートと軍手というのが基本だった。足下はもちろんズックである。この恰好で角材を手にすれば、即席で新左翼の闘士が誕生した。

タオルは「面」が割れないようにするのと、催涙ガスを少しでも吸引しないようにするためだった。レインコートは機動隊の放水に備えるためである。この恰好で通常の山手線や私鉄の電車にドヤドヤと乗り込んで、〝戦場〟を移動したのだから、何ともマンガチックではある。

ともあれ十一月十六日、中核派は五千人の勢力で立ち向かった。

まず、午後四時に先発隊五百人が国鉄京浜東北線蒲田駅に降り立った。ここから羽田空港に向けて進んだところ、途中で機動隊に阻止された。ここで百人が逮捕された。

同じころ、別動隊百五十人が警視庁蒲田署に火炎ビンを投げた。さらに別動の五百人は非常停止コックを引いて京浜東北線の大森―蒲田間で電車を停め、線路沿いに羽田に向かって〝進軍〟した。先発隊と蒲田駅前で合流したが、再び機動隊に行く手を阻まれた。

その後、蒲田署を再度攻撃し、品川署に押しかけ、五百人をもって交番を襲い、午後七時、ＭＬ派三百人、社学同

二百人と合流して八時過ぎまで機動隊ともみ合った。
一方、社学同の赤ヘル隊一千五百人は、東横線田園調布駅で電車から降り、徒歩で下丸子を経て蒲田に向かった。この部隊も途中で機動隊とぶつかり、蒲田駅にたどいついたときは百人に減っていた。
ＭＬ派一千人は京浜東北線がストップしていたため品川で降り、品川署前で機動隊と衝突した。プロ学同・フロント連合の四百人は東急池上駅から羽田空港を目指したが、池上署前で機動隊と衝突した。反帝学評の五百人は東京駅で機動隊の先制攻撃を受けた。
新左翼各派が個別に行く手を阻まれ、動きを封じられた翌十七日、佐藤訪米のスケジュールは大きな混乱もなく、無事に終了した。首相佐藤栄作ら一行は、自衛隊のヘリコプター四機に分乗し、官邸から十分で羽田飛行場に到着した。
新左翼各派は、アジテーションで口にする過激な言葉とは裏腹に、動員力や機動力の限界を露見していた。それを尻目に赤軍派は、より「革命」的であろうとした。大菩薩峠の挫折を経て、彼らは世界の反帝勢力と手を結ぼうと企てた。
十一月中旬、同派「国際部長」の元京大生が結婚し、新婚旅行を兼ねてメキシコを経由してキューバに潜入した。
ここで現地の勢力とコンタクトを取った。彼らはまず、キューバに革命の拠点を作ろうと考えた。この企ては「フェニックス計画」と名づけられた。出国するだけでなく、高飛び用の航空機がなければならない。
議長・塩見が都内で逮捕されたとき、保持していた手帳に「ＨＪ」の文字があった。公安当局は人の名のイニシャルだと思って、深く追求しなかった。赤軍派ナンバーツーの田宮高麿は、塩見が逮捕されたことから計画が露見するのを恐れ、主要な幹部に
――フェニックス計画の発動を早める。
と連絡した。
当初、決行は三月二十七日に予定されたが、参加者の不都合が生じて三十一日に延期された。
当日、羽田空港に集まったのは九人だった。彼らは福岡行き日航ボーイング７２７ジェット旅客機「よど号」にバラバラに搭乗し、安定飛行に移った富士山上空で行動を起こした。
ハイジャックだった。
――平壌に飛べ。
と田宮が命じた。
北朝鮮の平壌に逃れた九人のうち、元工員の吉田金太郎はほどなく平壌で病死、リーダーの田宮も九五年に死亡し

たが原因は分かっていない。岡本武も未確認ながら一九八八年に死亡したと伝えられている。

柴田康弘は八五年に日本に戻ったが八八年に逮捕され、田中義三は二〇〇〇年にタイで身柄を拘束された（日本に送還され逮捕）。

若林盛亮、小西隆裕。赤城志郎、安部公博の四人は、ポプラ事件が勃発した一九七六年、そろって平壌で結婚式を挙げた。その後異変がなければ現在も平壌にとどまっているはずである。

二

七〇年の三月十五日、アジトを出たところで議長の塩見が警視庁に逮捕され、同三十一日に実行したフェニックス作戦で幹部九人が北朝鮮に出国した。このことで赤軍派は壊滅的な状況に追い込まれた。このため赤軍派の残党は、いったん離脱していた森恒夫をリーダーに立てて再編を進めていった。

――活動を継続するために資金の強奪も辞さず。

とした森に、はたしてどれほどの思想性があったか。

ともあれ森の指導のもとで「ＰＢＭ作戦」が動き始めた。

・Ｐは「ペガサス」＝人質を取って獄中の幹部を奪回

・Ｂは「ブロンコ」＝国際拠点の建設

・Ｍは「マフィア」＝活動費の確保

だったが、ＰとＢは非現実的に過ぎた。

結果として、Ｍのみが実行に移された。

この時期、治安当局は赤軍派より「京浜安保共闘」を名乗る過激派の動きに目を光らせていた。京浜工業地帯の労働者や学生を中心に赤軍派とほぼ同時期に結成され、「武装闘争によって政権が生まれる」というスローガンを掲げていた。

京浜安保共闘は六九年十月三十一日、岐阜県の赤坂山石灰採掘現場からダイナマイト十五本、雷管三十本を盗み、アメリカ軍の厚木基地、立川基地、横浜の米国館などで爆破未遂事件を起こしていた。

また七〇年十二月十八日に東京の志村署上赤塚交番を襲撃し、拳銃を奪おうとした横浜国立大学生・柴野春彦が巡査に射殺された。彼らはその報復を思い立ち、交番に手製爆弾を投げ込み、警視総監公邸や警視庁職員寮に爆弾を仕掛け、ついに小包爆弾作戦を実行した。

翌七一年二月十七日、栃木県真岡市の塚田銃砲店から散弾銃十丁と空気銃一丁、散弾実砲二千三百発が強奪された。次いで二月二十二日、千葉県市原市の辰巳台郵便局で現金七十一万八千六百七十八円が強奪される事件が発生した。

赤軍派は強奪した現金のうち三十万円で、京浜安保共闘から銃二丁と実弾二百発を購入した。以後、現金強奪事件が頻発した。

横浜市の小学校職員給与強奪事件（五月十五日）からほどなくして、新左翼各派は六月十七日、「沖縄返還調印阻止闘争」を展開した。

午後九時、デモを規制中だった機動隊の隊列に鉄パイプ爆弾が投げ込まれた。機動隊員二名が腹部裂傷、大腸露出の重傷を負ったほか、計三十七人が重軽傷を負った。赤軍派と京浜安保共闘の合体がこうして準備されていく。

七一年十二月十八日、警視庁警務部長の土田国保宅に届いた小包が爆発した。その妻・民子が死亡、そばにいた四男も重傷を負った。

この日、午後六時から板橋区民会館で「一二・一八柴野春彦虐殺弾劾一周年追悼集会」が開かれた。主催は京浜安保共闘と赤軍派の合同だった。二つの超過激ゲリラ組織が手を結んだときだった。

十二月二十四日のクリスマス・イブ、新宿伊勢丹デパート前の四谷署追分交番でクリスマスツリーに見せかけた爆弾が爆破した。二人の巡査が重軽傷を負い通行人十人が巻き添えをくった。

一方、京浜安保共闘は赤軍派に銃、実弾を売却した三十万円で山梨県北都留郡に「小袖ベース」、同じく山梨県東山梨郡の破不山に「塩山ベース」をそれぞれ設けていた。

相前後して向山茂徳、早岐やす子の二人が組織から抜けたため、この二つの秘密基地は撤収されたが、ここから先、彼らは狂気の世界に入っていく。

幹部の永田洋子、坂口弘、寺岡恒一、吉野雅邦らは、

――組織防衛のためには、逃走した二人を殺さなければならない。

と決意し、八月四日、早岐やす子を絞殺して、死体を千葉県印旛沼付近の雑木林に埋め、同十日には小平のアジトに向山茂徳を誘い出して絞殺した。

その死体は早岐と同じ印旛沼の雑木林に埋められた。殺された二人が埋められていたのは、十メートルも離れていない穴だった。彼らは殺人集団になった。

九月以後、彼らは関東地方の山に秘密基地を建設していったが、逮捕者が出るたびに露見を恐れて撤収せざるを得なかった。神奈川県丹沢に「丹沢ベース」、十月には静岡県大井川に「大井川ベース」、十一月には群馬県北群馬郡伊香保町の山中に「榛名山ベース」を設置した。このとき、京浜安保共闘は女性九人を含む計二十人だった。

十二月二十日、森恒夫が率いる赤軍派の九人が合流した。「連合赤軍」がここに誕生した。

その合体は、豊かな資金を持つ赤軍派と、武器や秘密基地を持つ京浜安保共闘の野合にほかならなかった。

革命戦士として戦うには、まず、全メンバーを共産主義化させることを党建設の中心として位置づけることであった。それは、人間の共産主義化であり、人間改造の手段として「総括」があり、銃器奪取闘争、殲滅戦争がある。敵を倒すことで日本革命戦争＝味方の飛躍―建軍という常に発展性を有した新たな地平が開かれる。

などというのは詭弁以外の何物でもなかった。

彼らは森恒夫を中央執行委員長、永田洋子を副委員長とする「人民裁判」を行い、十二月三十一日から翌七二年一月十七日にかけて、榛名山ベースで八人を殺害した。車で死体を運び、榛名山のふもとの倉渕村の山林に埋めた。

そうこうしているうち、「総括」を恐れた一人が逃走した。これによって彼らは再び移動を余儀なくされたが、バスを利用したためにすべてが白日のもとに晒されるきっかけとなった。運転手が群馬県警に通報したのである。

このとき群馬県警は、次のように情報を発信した。

――妊娠した女性を含むハイカーの一向が、榛名山中に入ったまま行方が分からなくなっている。お気づきの方は最寄の警察、消防などに通報願いたい。

この情報は報道機関に手渡され、東京でもニュースとして放送された。

この間、連合赤軍はアジトを沼田市上発知町の山林に移していた。ここに「迦葉山ベース」を設け、一月三十日から二月八日にかけて三人を殺害した。ニュースで流れた「妊娠中の女性」というのは嘘ではなかったが、彼女はここで殺害されている。

二月一日から警視庁は、指名手配中の森、永田、坂口ら十人の顔写真をテレビ・スポットで流し、市民の協力を呼びかけ始めた。当局が危惧したのは、危機的状況に追い込まれたと認識した京浜安保共闘と赤軍派が暴発することだった。

そのさなか、二月三日から森と永田は大胆にも東京に戻り、資金を調達していたことが、のちに明らかになった。次いで同月九日、坂口が都内に戻って森、永田と連絡を取った。その連絡とは、二月八日に男性一人、女性二人が逃亡した、というものだった。

二月十五日、森と永田は新たに設置された妙義山ベースに向う途中、同日の朝刊で榛名山ベースが群馬県警に発見されたことを知った。

十六日、山中に取り残された男女各一名が逮捕され、翌

十七日、午前六時から総員五百人を動員して実施された群馬県警による妙義山の山狩りで森と永田が遂に逮捕された。

十八日、警視庁は群馬県警四百七十人、栃木、茨城、長野、埼玉、新潟、神奈川の各県警から計一千三百人、警視庁から一千人を動員して幹線道路などを一斉検問を行った。同日、森と永田が逮捕されたというニュースをラジオで知った一党九人は、山越えして長野県軽井沢町のレイクニュータウン若草山に逃げ込んだ。

十九日朝、男女各二名、計四人が国鉄軽井沢駅で長野県警に逮捕された。四人は衣類や食糧などを購入するために山を下りてきたのだった。それを知った残りの五人は、定期便のトラックを運転手ごと奪って逃走し、無人の山荘「さつき山荘」に侵入して一息ついていた。

このとき、五人の機動隊が積雪に残る足跡を追って「さつき山荘」までやってきた。午後三時過ぎ、中の様子を見ようとした機動隊員に向って連合赤軍は銃やライフルなどを乱射した。これにより警官一人が顔や脚に全治三週間の外傷を負った。

連合赤軍の五人は「さつき山荘」から約五百メートル離れた河合楽器の保養所「あさま山荘」に侵入した。のちの検事調書によると、午後三時二十分ごろだったとされている。

三

あさま山荘には、たまたま管理人・牟田郁男の妻・泰子が居合わせ、人質になってしまった。このとき五人の中で若干の意見の相違があった。当時二十三歳だった元横浜国大生・吉野雅邦は、「車で強行突破して、どこかの山中に逃げ込もう」と主張した。

山荘の前に管理人の自家用車があった。

対して二十五歳の元東京水産大生・坂口弘と京大卒の坂東国男は、「無理だ」と言った。

彼らは玄関や一階非常口などを家具や布団、畳などで封鎖しバリケードを築き、三階の「いちょうの間」に立て籠もった。このとき、彼らが所持していたのは、ライフル銃一、拳銃一、二連発銃三、五連発銃一、爆弾数個、実弾約七百発だった。

県警本部は軽井沢署に「連合赤軍軽井沢事件警備本部」を設置し、三百八十八人で山荘を包囲した。警察庁でも、「連合赤軍あさま山荘警備本部」が設置され、警察庁長官・後藤田正晴の任命で警備局参事官・丸山昂、警備局付警務局監察官・佐々淳行らが長野県警に派遣された。このなかに公安第一課の警視だった亀井静香（のち衆院議員）

がいた。
警察による説得工作は二月二十日午前六時過ぎから始まった。
――山荘にいる諸君に告げる。君たちは完全に包囲されている。のがれることはできない。これ以上罪を重ねることはやめなさい。管理人の奥さんはまったく関係ない人だ。早く返しなさい。君たちの仲間はすでに逮捕された。君たちも抵抗をやめて出てきなさい。君たちの家族や友人もみんな心配している。無駄な抵抗はやめて出て来なさい。
これに連合赤軍は発砲で応じた。
二十一日、スナック喫茶経営者田中保彦が立ち入り禁止区域に侵入した。警察が軽犯罪法違反で逮捕すると田中は
「人質の身代わりになるために来た」
と言った。
この日、連合赤軍の五人は立て籠もったあさま山荘のテレビで、アメリカのニクソン大統領と中国の毛沢東主席がにこやかに握手する姿を見た。
二十二日には日野市からやって来た島田勝之という画家と信越放送の桂富夫記者が山荘に近づこうとしていたところを警察に取り押さえられた。その隙を突いて、田中保彦が北側斜面をよじ登り、山荘西側を廻って南側玄関に到達した。
吉野が
――帰れ。帰らないと撃つぞ。
と怒鳴ったが、男は知らん振りで、警察部隊の方に向かって手を振ったりウインクしたりした。坂口はこの男を警察だと思い、拳銃を発射した。
田中は倒れたものの、すぐ自力で起き上がって警察隊まで歩いてきた。救急車で軽井沢病院に運びレントゲン写真を撮ったところ、三八口径の弾が脳の中に留まっていた。佐久病院で弾の摘出手術を受けたが、三月一日に死亡した。
彼は覚醒剤の常習者で、過去に何度も警察の厄介になったことがのちに分かった。撃たれたときも、やや常軌を逸した言動があった。だが、さすがに警察当局はそのことを口にできなかった。
午後、「救援連絡センター・モップル社」と名乗る四人の男が軽井沢署を訪れ、申し入れ書を示して面談を求めた。夜になると今度は岡山県の右翼団体「士誉の会」がやってきた。山荘に飛び込み、日の丸を立てる、という。
彼らは警察の説得に応じて引きあげたあと、近くの宿に報道陣を集めて警察の対応をののしり、だけでなく連合赤軍を弁護する論を開陳した。このため報道陣はあきれて記事にしなかった。警察はこうした有象無象の輩にも対応しなければならなかった。

四

あさま山荘の様子は全国にテレビで中継され、野次馬が押し寄せた。警察はレイクニュータウン別荘地への道路を遮断したが、違法駐車は三千台を超えた。そうした物見高い人を目当てに屋台まで立ち並んだ。

説得工作とともに警察が取った作戦は、「擬音作戦」だった。催涙ガス弾の発射音、機動隊指揮官の号令、警備車のエンジン音などをテープに録音して拡声器で流す一方、屋根に向かって石を投げた。

犯人たちを眠らせないようにし、できるだけ弾薬を消耗させるねらいがあった。この作戦は大きな効果をあげた。

二十四日午後四時過ぎ、警察は

――君たちが抵抗をやめないので我々は武器を使用する。

とメガホンから流し、銃眼に向け高圧放水を開始した。その水は屋根や軒から流れ、たちまち氷柱になった。水の勢いで玄関ドアのガラスが割れ、そこを狙ってガス弾が撃ち込まれた。

二十六日は双方に目立った動きがなかった。

このとき警察は人質救出作戦を練っていた。同日午前十一時半、報道陣五十六社と警察の間で「Xデー報道協定」が結ばれた。

二十七日、携帯ラジオから警察の動きに関するニュースがなかったことから、犯人たちも何かが迫っていることを察知した。

二十八日が「Xデー」だった。

作戦は午前八時の警告広報で始まった。

――連日に渡る警告や説得にもかかわらず、君たちは何の罪もない泰子さんを監禁している。監禁時間は二百時間を超えた。もう、これ以上待つことはできない。これ以上罪を重ねることなく泰子さんを解放して銃を捨てて出てきなさい。また、話し合うなら、白布を持って警察部隊の見えるところに立ちなさい。

午前十時前、最後通告がスピーカーから流された。

――山荘の犯人に告げる。君たちに反省の機会を与えようとする我々の警告にもかかわらず、君たちは何ら反省を示さない。最後の決断の機を失って一生後悔することのないよう考えなさい。今こそ君らの将来を決するときだ。まもなく泰子さんを救出するため実力を行使する。

午前十時、一斉にガス弾が撃ち込まれ、山荘正面から高圧放水が開始された。山荘からは狂ったように銃弾が発射された。十一時ごろ、クレーン車の工事用モンケーン（大鉄球）があさま山荘のモルタル壁を破壊した。

第二機動隊の山野決死隊が三階南西側管理人室から山荘内に突入したのは午前十一時十七分だった。続いて第九機動隊の長田中隊が一階に突入し、これを占拠した。直後にクレーン車と放水車を指揮していた警視庁特科車輛隊の高見繁光警部が散弾銃で狙撃され、死亡。

第二機動隊の大津高幸巡査は山荘に突入しようとしたとき、顔面に散弾を被弾して、左眼を失明する重傷を負った。土塁端の大楯から様子を偵察していた第二機動隊長の内田尚孝警視はライフル銃で撃たれ死亡。

午後十二時三十八分、警察庁から拳銃使用の許可が出た。「適時適切な状況を判断し、適時適切に拳銃を使用せよ」というものだった。

午後一時、警察の攻撃が中断した。連合赤軍五人の投降を促すためだったが、午後二時五十分、三階調理室に鉄パイプ爆弾一発が投げ込まれた。このために機動隊から五人の重軽傷者が出た。

午後三時三十分を期して第二次攻撃が始まった。高圧放水の水は「いちょうの間」まで入り込んだ。続いてガス弾が一斉に射撃され、「いちょうの間」はガスが充満した。午後六時二十分ごろ、穴から楯をかざした機動隊員が一斉に飛び込んだ。連合赤軍五人が逮捕され、人質の牟田泰子が無事救出された。監禁二百十九時間ぶりのことだった。

～～～～　補　注　～～～～

田宮高麿　たみや・たかまろ／１９４３２～１９９５。岩手県に生まれ一九六二年大阪市立大学に入り日韓条約反対、アメリカ軍原子力潜水艦寄港反対阻止闘争などに参加、六八年塩見孝也らとともに武装蜂起論を唱える赤軍派を結成した。七〇年三月議長・塩見が逮捕され、拘留中の塩見から「ハイジャック中止」の指示を受けたが同月三十一日に決行した。当初はキューバに行く予定だったという。九五年北朝鮮平壌で心臓発作のため死去と伝えられる。

よど号ハイジャック事件　赤軍派にハイジャックされたとき機長が機転をきかせ「燃料を補給する」と言って、福岡空港に着陸した。ここで公安当局と押し問答の交渉があり、搭乗者のうち女性と子ども計二十三人が解放され、次いで着陸した韓国金甫空港で運輸省政務次官・山村新治郎が身代わりに人質となることを条件に乗客全員が解放された。このとき赤軍派の犯行声明にあった「われわれは明日のジョーである」という言葉について、治安当局は何かの暗号であろうと緊張した。金甫空港は平壌空港であるかの擬装が施され、ハイジャックした赤軍派もそれを信じてタラップを降りる寸前だった。ところが犯人グループの一人が窓の外にアメリカ空軍のジェット戦闘機やフォルクスワーゲンのマークを発見したために擬装が露見した。機長は中学校で使う地図帳を頼りに平壌まで飛んだという逸話がある。

▼山村新治郎　やまむら・しんじろう／１９３３～１９９２。千葉県選出の衆議院議員で、よど号ハイジャック事件のとき人質の身代わりとして北朝鮮に渡り、四月五日解放された。のち農林水産大臣、運輸大臣、衆議院予算委員長を歴任した。

森　恒夫　もり・つねお／１９４４～１９７３。大阪に生まれ六三年大阪市立大学に入った。赤軍派に入り六九年退学、赤軍派「東京戦争」では一隊員の立場にあったが議長・塩見孝也逮捕、よど号ハイジャックによる幹部の北朝鮮脱出などで浮上した。七一年浅間山荘事件前に逮捕され七三年元旦東京拘置所で自殺。遺稿集『銃撃戦と粛清』（八四年）がある。

現金強奪事件

2月27日　茂原市高帥郵便局：９万４９００円
3月4日　船橋市夏目郵便局：１万５３５０円
5日　相模原市横浜銀行相模台支店：１５０万９千円
22日　泉市振興相互銀行黒松支店：１１５万９２００円
5月15日　横浜市吉田小学校：職員給与３２１万６５３９円
6月24日　横浜市横浜銀行妙蓮寺支店：３２６万円
7月22日　米子市松江相互銀行米子支店：６０５万１６００円

後藤田正晴　ごとうだ・まさはる／１９１４～２００５。徳島県に生まれ一九三九年東京帝国大学法学部を出て内務省に入った。第二次大戦後自治省を経て六九年警察庁長官、七二年内閣官房副長官ののち七六年衆議院議員となった。自治大臣、行政管理庁長官、総務庁長官、内閣官房長官、法務大臣、副総理を歴任した。〝カミソリ後藤田〟の異名を持つ。

佐々淳行　さっさ・あつゆき／１９３０～２０１８。東京に生まれ五四年東大法学部を出て国家地方警察本部（現・警察庁）に入った。警察大学校（助教授）、大分県警、埼玉県警、大阪府警、警察庁等に赴任し、あさま山荘事件のとき警視庁機動隊の指揮を担

当した。

亀井静香　かめい・しずか／１９３６～　：広島県に生まれ一九六〇年東京大学経済学部を出て別府化学工業（現・住友精化）に入った。六二年警察庁に入り、鳥取県警察本部警務部長、埼玉県警察本部捜査二課長などを歴任した。七一年警察庁警備局極左事件初代統括責任者となり、成田空港事件、連合赤軍あさま山荘事件、日本赤軍テルアビブ空港事件等を指揮した。七七年警察庁警備局理事官、長官官房調査官を経て退官し七九年衆院議員。九四年村山内閣で運輸相、九六年橋本内閣で建設相、九八年亀井派を結成し、二〇〇三年自民党総裁選に立候補したが小泉純一郎に敗れた。

カップ・ヌードル　日清食品の創業者・安藤百福が「チキンラーメン」をスーパーの仕入れ担当者に試食してもらったとき、それを砕いて紙コップに入れお湯を注いでからフォークで食べた。それを見て、カップ入りのインスタントラーメンならお湯さえあればどこででも食べることができるというアイデアがひらめいた。容器は保温性がよく軽くて丈夫な発泡スチロール、フリーズドライの具を入れた「カップヌードル」が発売されたのは七一年五月だった。

日本IT書紀　182 暴発

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。